

シャングリラ伝説をめぐる

社会マネジメント学科 教授 栗 原 悟

はじめに

現在、シャングリラの名は、ホテル、レストラン、音楽、小説、マンガ、アニメから、アメリカ海軍空母さらにはアジア安全保障会議の通称に至るまで、さまざまな分野で使われている。なぜ、“シャングリラ”という聞き慣れない（今となっては聞き慣れてしまった）、不思議な響きの言葉がこのように幅広い分野で使われるようになったのであろうか。

本来、シャングリラという用語は、『チップス先生さようなら』などの代表作で有名なイギリスの作家ジェームズ・ヒルトンが1933年に出版したLOST HORIZON『失われた地平線』のなかで描いたチベット地方の理想郷の呼称である。この作品は、1937年に映画化もされてヒットし、第10回アカデミー賞で2部門を獲得している。

このシャングリラという、謂わば“魔法にも近い流行語”は、その言葉の持つ文化的魅力に加えて、どこか異国情緒を掻き立てるためか主に観光業を中心とした経済的魅力をも備えており、ジェームズ・ヒルトンが架空の世界として描いたにもかかわらず、実際に我が地方こそシャングリラであると表明して、それまでの地名をシャングリラの名に変えてしまった例さえ現れるようになった。拙著『雲南の多様な世界－歴史・民族・文化』のなかで、その経緯について論述した、中国雲南省「香格里拉」（シャングリラ）県の誕生がその好例であろう。2001年に、それまでの中甸県が名前を変えたのである。同地方は、主にチベット族が居住する地方であるのでヒルトンが描いたチベットの“ある地方”であることには違わないが、当然その他の地方も可能性があり、実際に名乗り出ようとした地域もあったであろう。しかしながら、なぜか雲南

省西北部に位置する迪慶（ディチン）蔵族（チベット族）自治州の中甸県がいち早く「香格里拉」（シャングリラ）県と変更することが中国の國務院の認可によって決まったのである。これを機に、この地方はそれまでの辺境の後進地域から徐々に“目新しい”観光地として変貌を遂げている。これは、名称変更をきっかけに“まちおこし”を進める辺境地域の一例とも言えるだろう。

本稿では、ヒルトンが描いたシャングリラという理想郷のイメージならびに様々な分野への影響について検討するとともに、その源流となったであろう「シャングリラ伝説」さらには「シャンバラ伝説」をめぐって、理想郷のあり方などを考察してみたい。まずは、シャングリラとは何か、そしてシャングリラという“魅惑的な”流行語の広がりなどからみていくことにしよう。

I. シャングリラとは

1. その名の由来とイメージ

シャングリラは、チベット語ではShangri-La という綴りになり、Shangシャン（グ）はチベットのツァン地方の一地域で、riリーは山の意、Laラは峠の意である。すなわちシャングリラ（シャングリ・ラとも表記）とは「シャンの山の峠」を意味する。シャン地域の山を超えた周辺というような意味であろうか。

では、ここで言うシャンとはチベットのどの地方であろうか。チベット（あくまでチベット族が考える歴史的チベット族居住区の領域）は、以下のように大きく三つの地方に分かれる。

- (1) ウーツァン…中央チベットとも呼ばれ、中華人民共和国における西藏自治区(チベット自治区)の大部分。歴史的・伝統的にウーとツァンの2地域に分かれる。
- (2) ドトエ…歴史的・伝統的にカムとも呼ばれ、中華人民共和国においては、以下の行政区分などから成る。西藏自治区の東部を占めるチャムド地区（昌都地区）、四川省甘孜チベット族自治州、四川省涼山イ族自治州木里チベット族自治県、雲南省迪慶チベット族自治州。
- (3) ドメー…歴史的・伝統的にアムドとも呼ばれ、中華人民共和国においては、以下の行政区分などから成る。青海省の全域、甘肅省甘南チベット族自治州、

甘肅省武威市天祝チベット族自治県、四川省阿壩チベット族チャン族自治州。

シャングリラのシャンは、(1) のウーツァンのツァン地方の一地域である。ちなみに既述した雲南省のシャングリラ県は、(2) の雲南省迪慶チベット族自治州下のかつての中甸県にある。

また、一説によればシャングリラとは、チベット語で「肉切り包丁の峠道」を意味し、それほど陰阻な細い峠道を辿ってようやく到達できる秘境と考えられている。もともとシャングリラはヒルトンが架空につくりあげた理想郷であり、実際にその地を特定することは至極困難なはずである。それでもこれまでその理想郷に近い“地域探し”が行われてきたのである。そこは例えば、中央アジアにある未知の桃源郷であるとされたり、あるいはヒマラヤ山中にある隠れた理想郷とされたり、はたまたネパールにあるとの説まである。そのイメージは、ヒマラヤ奥地の神秘的なユープアとしてすっかり定着し、そこで暮らす人々は不老不死で、天国のような場所だとみなされている。いずれにせよ、そこは多くの困難を乗り越えた者だけが到達できる所とされているのである。

2. 様々な分野に及ぶシャングリラ

すでに述べたように、シャングリラの名は、世界的に様々な分野で使われている。近年、日本でも様々な分野で使われている。例えば、日本の代表的なSF小説のストーリーは以下のようなものである。

地球温暖化防止のため、森林都市に生まれ変わる東京。しかし、そこは理想郷（シャングリ・ラ）ではなかった。「地球温暖化」の影響で近未来の「東京」は熱帯都市へと変貌する。一面の森となった東京で、特権市民はタワー状の積層都市アトラスに住み、庶民は地上でスコールと地盤沈下の脅威におびえ生活していた。危険なジャングルと化した森で武装ゲリラを率いる18歳の主人公、北条國子は誰もが幸せに暮らせる未来を手に入れるため、カーボンファイバーでできた巨大ブーメランを手し、庶民を置き去りにした一方的な“森林化”を進める政府軍に対して真っ向から戦いを挑む。

これは、角川書店から2005年に出版された池上永一のSF小説『シャングリ・ラ』の大まかなストーリーである。その後、2008年にマンガ化され、さらに2009年にアニメ化された。この作品の中では、我々現代人が抱える様々な問題、例えば地球温暖化などの環境問題や格差問題などが描かれており、何が我々現代人の理想郷すなわちシャングリラ（シャングリ・ラ）なのかが鋭く問い続けられている。

シャングリラという用語を使って理想郷を求める例は、アジア諸国において決して日本に限られたことではない。むしろチベットを国内に治める中国や東南アジア諸国にも多くみられる。なかでも、注目されるのが華僑・華人に関わる国や人々である。そこで、台湾映画と華人系が創設したホテルチェーンの例をみておきたい。

2008年、台湾で台湾・中国合作映画「シャングリラ」が制作された。日本では新宿K's cinemaで2010年に公開された。ティン・ナイチョン（丁乃筭）の監督によるが、これは1970年代生まれの中国、台湾、香港の女性監督10人が、雲南を舞台に映画を撮るシリーズ“雲南影響”の第三作として撮られたという。我が子を事故で失った台湾人女性が、雲南への旅を通じて自己を見つめなおす、というストーリーである。事故の真相や、ヒロインの後を追って台湾から雲南へと渡る男の正体など、ミステリー仕立てになっており、映写される雲南シャングリラ県地方の風景も美しい。ここに登場する人々は主にチベット族である。脚本、監督が台湾人であるため、ここで描写されるのは台湾人の目線による雲南シャングリラである。子どもを亡くして失意のどん底で向かった先がシャングリラという設定は、台湾人にとっては大陸旅行気分を醸し出す働きとともに、亡き我が子（自らも）に対する一種の供養あるいは巡礼的な意味合いが意図されていたのだろうか。一方、中国国内の漢族（中国人の90%強が漢族）にとっても、雲南やチベットなどは、国内とはいえ異国情緒を味わえる、まさに「内なる外国」なのかもしれない。ましてや台湾人ならなおさら、異国・民族情緒を味わえる辺境であろう。しかしながら、シャングリラはあくまで西洋人がつくりだした理想郷であり、“それを装う”雲南シャングリラに向かうということは、アジアの人々が理想と現実の狭間を再発見（あるいは直視）する旅と言えるのではないだろうか。

1971年に、マレーシア出身の中国系企業家ロバート・クオック（郭鶴年）がシンガポールに最初に開いたホテルがShangri-La Hotels and Resorts（シャングリ・ラ・ホテルズ&リゾート、中国語では香格里拉酒店及度假酒店集団）である。現在は、“世界に広がる伝説のおもてなし”などをキャッチフレーズにして、アジア・中東などを中心に47のホテルとリゾートを展開する。香港に本拠地を置くケリー・グループ（嘉里集団）が経営するホテルチェーンであるが、2009年3月、日本にも進出し、シャン

グリ・ラ東京を丸の内トラストタワー本館27～37階に開業した。さらに、中国雲南省香格里拉（シャングリラ）県にシャングリ・ラホテルデチェンを2015年に開業している。このホテルチェーンで注目されるのが、その創業地であるシンガポールの同ホテルで毎年開催されるアジア太平洋地域の国防大臣などが多数参加する国際会議であり、その名をアジア安全保障会議、通称シャングリラ会合と呼ばれていることである。ホテルの名前からの通称とはいえ、理想郷シャングリラという名を冠しての安全保障会議がどれほどの平和維持を齎しているのか、やはり理想と現実の“綱の引き合い”で地域の課題や防衛協力などが話し合われているのだろうか、大いに気になるところである。

3. 世界地図に記された「香格里拉」

雲南省でかつて中甸と呼ばれた地域は、チベット語では「ギャルタン」と呼ばれてきた。中華民国時代の1913年に中甸県が設置され、更に中華人民共和国成立後の1957年に自治州管轄に改編となった。そのような中甸県は、辺境の一地方から主に観光開発などの“まちおこし”のために「シャングリラ伝説」にいち早く注目し、県を上げてシャングリラのモデル地域は中甸県であると宣伝工作などを進めた。その後、同じ雲南省の麗江ナシ族自治県などもこの“競争”に参戦するが、中甸県が2001年12月に国务院より「香格里拉県」と県名変更を認可され、1996年から5年余り続いた「香格里拉」獲得競争に一定の終止符がついた。この結果、世界地図の上に香格里拉（シャングリラ）という地名が記されることになったのである。

同県地方では、雲南省西北部のヒマラヤ山脈の東の端に位置し、その周辺には金沙江（長江）、瀾滄江（メコン川）、怒江（サルウィン川）というアジアを代表する三つの大河が平行に流れる世界的奇観と呼べるすばらしい風景がみられる。そこは天然の生態環境と民族の伝統的な文化を留めている珍しい地域であるとも言えるだろう。「高山にある大花園」、「動物植物の王国」、「ノンフェラス・メタル（非鉄金属）の王国」とも呼ばれ、自然風景や名勝古跡を持つ中国の八大旅行ホットラインの一つにも数えられている。香格里拉という地名の変更を機に、同地域は数年の観光開発のため新たな“街づくり”を進めたことで、それまでの牧畜、木材ならびに松茸収穫などを主要産業とした辺境の後進地域から徐々にではあるが、観光客を惹き付ける地方へと変貌してきている。

Ⅱ. 『失われた地平線』をめぐる

1. ジェームズ・ヒルトンという作家

ジェームズ・ヒルトン（James Hilton）は、1900年9月9日にイギリスのランカシャーのリー（Leigh）で生まれた。父ジョン・ヒルトンは、ロンドンのウォルサムストンにあるチャペル・エンド・スクールで校長を務めた人物である。父からの強い影響や、後にケンブリッジのレイズ・スクールに通うことで出会った教師たちとの交流が、彼の代表作の一つ『チップス先生さようなら』の設定や先生のキャラクター造型などに深く関わっていたと考えられる。

ヒルトンが小説家になるきっかけとなったのは、ケンブリッジ大学のクライスツ・カレッジ在学中に、アイリッシュ・インディペンデント紙の主筆と知遇を得て週2回の記名寄稿を始めたことによる。

その後、マンチェスター・ガーディアン紙などにも文芸評論を載せるようになる。1920年の19歳の時に17歳で執筆した処女長編『キャサリン自身』を出版した。文才があったとはいえ、かなりの早熟さに目を見張るものがあると言える。大学卒業後は、就職難のために新聞や雑誌に記事や書評を寄稿して、生計を立てながら小説の執筆を続けた。『今宵ぞさらば』、『繰り返し日歩』で一部の批評家には認められたが、やっと小説家として日の目をみたのは1933年、ヒルトン33歳の時である。

ブリティッシュ・ウィークリー誌のクリスマス特別号から連載した『チップス先生さようなら』が、アメリカのアトランティック・マンズリー誌に転載されて好評となり、1934年6月に単行本化されてベストセラーとなった。またこれにより旧作の『失われた地平線』、『鎧なき騎士』も評価され、『失われた地平線』はホーソーnden賞を受賞した。

1935年、作品の映画化のためアメリカに渡り、1937年には家族とともにハリウッド近くに住んだ。

すでに述べたが、映画「失はれた地平線」（原作のタイトルとは少し表記が違うが）は1937年に公開されると大ヒットとなり、第10回アカデミー賞の室内装置賞と編集賞の2部門を獲得した。1942年には、映画「ミニヴァー夫人」でジャン・ストルーザーらとともにアカデミー脚本賞を受賞した。2度結婚をし、執筆活動の傍らこよなく音楽を好んだ生涯であったが、1954年カリフォルニア州ロングビーチで癌により死去した。

2. 作品の数々

ヒルトンの作品を年代順に示せば、以下の通りである。() 内はアメリカでのタイトル、[] 内は日本語訳のタイトルをそれぞれ示している。

- 1920年 *Catherine Herself* [キャサリン自身]
1922年 *Storm Passage* [嵐の道]
1924年 *The Passionate Year* [多感な年]
1925年 *Dawn Of Reckoning* (アメリカ題 *Rage In Heaven*)
1926年 *Meadows Of The Moon*
1927年 *Terry*
1928年 *The Silver Flame* (アメリカ題 *Three Loves Had Margaret*)
1931年 *Murder At School* (アメリカ題 *Was It Murder?*)
グレン・トレヴァー (Glen Trevor) の筆名で書いた推理小説 [学校の殺人]
And Now Goodbye (今宵ぞさらば)
1932年 *Contango* (アメリカ題 *Ill Wind*) [繰り返し日歩]
1933年 *Knight Without Armour* (アメリカ題 *Without Armor*) [鎧なき騎士]
Lost Horizon [失われた地平線]
1934年 *Goodbye, Mr. Chips* [チップス先生さようなら]
1937年 *We Are Not Alone* [私たちは孤独ではない]
1938年 *To You, Mr Chips*
1941年 *Random Harvest* [心の旅路]
1944年 *The Story Of Dr. Wassell*
1945年 *The So Well Remembered* [忘れえぬ日々]
1948年 *Nothing So Strange*
1949年 *Twilight Of The Wise*
1951年 *Morning Journey* [朝の旅路]
1953年 *Time And Time Again* [めぐり来る時は再び]

以上が作品の数々であるが、いくつかコメントをしておきたい。まず、『失われた地平線』には、フランク・デマルコ作『Messenger』、エレノア・クーニー&ダニエル・アルティエリ作『Shangri-La』という2つの続編がある。同書は「ポケット・ブ

ックス」第1回配本の1冊として出版されて、1930年代によく売れたので、ペーパーバック革命を起こした本としてしばしば言及されている。次に、1938年に刊行された *To You, Mr Chips* は『チップス先生さようなら』の続編。また、1941年に刊行された、欠落した記憶を求め放浪する、二つの世界大戦の間での物語 *Random Harvest* 『心の旅路』は、戦後の日本で映画が公開されてファンの心をとらえ、記憶喪失患者の代名詞として使われるほどになったと言われている。最後に、グレン・トレヴァー (Glen Trevor) の筆名で書いた推理小説 *Murder At School* は、現在日本のポプラ社から「ミステリーボックス」の一作として『学園連続殺人事件』として2004年(初刷1986年、第17刷)に翻訳出版されており、読むことができる。

3. 小説 LOST HORIZON『失われた地平線』と映画化(「失はれた地平線」)

ヒルトンの代表作の一つであるLOST HORIZON『失われた地平線』は、プロローグで始まり、エピローグで終わる、所謂「額縁」小説の形になっていて、そのなかに第1章から第11章で構成されている。

物語の主人公はイギリス領事のコンウェイであるが、プロローグとエピローグだけ彼の物語を聞く“私”の話という展開になっている。まずプロローグでは、学生時代の仲間たちと集まった私がそこでたまたまある事件の話を聞くところから始まる。インド(当時イギリスの植民地化にあった)のバスクルというところで革命が起こり、軍の飛行機で民間人を避難させることになった。ところが、ある飛行機が何者かに乗っ取られて、そのまま消息を絶ってしまった。私の友達で作家をしているラザフォードは、そのいなくなった飛行機に乗った男を知っているという。それが同じ大学だったコンウェイというイギリス領事であった。少し前にラザフォードは、思わぬところでコンウェイと再会した。とある修道院にぼろぼろの姿で、記憶のおぼろげな男がいて、それがコンウェイだったという。コンウェイはこの世に存在していないはずのショパンの曲をピアノで弾いて、周りをびっくりさせた。そして記憶が戻ると、姿を消してしまった。ラザフォードはその少し前にコンウェイから消息を絶ってしまった飛行機がどこに行ったのか、そこでどんなことがあったのかの不思議な話を聞き、それを書きとめたという。その後、本編の物語に入っていく。

消息を絶つことになる飛行機に搭乗したのは4人。まず主人公のイギリス紳士の典型ともいえるクールでいつも冷静な領事コンウェイ、同副領事チャールズ・マリンソン大尉、訳ありのアメリカ人ヘンリー・D・バーナード、そして東方伝道会のミス・

ロバータ・プリंकローである。一度給油のために着陸するが、飛行機の操縦士がいつの間にか違う人にすり替わり、目的地とは違うところへ飛んでいってしまう。どうすることもできない4人。結局、チベットの山奥に飛行機は着陸する。かなり強引な着陸だったせいか、操縦士は死んでしまう。途方に暮れた4人の元へ、駕籠を抱えた地元の人々がやって来る。駕籠から降りてきたのは、シャングリ・ラの僧院の英語を話すチャンというラマ僧だった。こうして4人は幻の国「シャングリ・ラ」へと足を踏み入れることになる。シャングリ・ラの人々は穏やかで、争いごとはない。下界が戦争で明け暮れるなか、仮に地球が減びそうになっても、シャングリ・ラが永遠に輝き続けるように、文化遺産を収集している。コンウェイは大ラマ僧との対話を通して、下界での行き果てぬ欲望やその醜さに思い知らされ、それとは対照的に「シャングリ・ラ」の理想的な世界に惹き込まれていく。

理想郷のシャングリラ、この奥地にだけ起こる不思議なことといえば、それは歳(年)をとらない不老不死の世界であることである。それどころか人々は若々しく健康的でさえある。4人はそれぞれの想いと関心からシャングリ・ラで暮らしていく。クールなコンウェイ、不思議とあせた様子を見せないバーナード、宗教的義務心に燃えるミス・プリंकロー。それでもどうしても帰りたいと強く願うのは、若きマリソンソーン一人であった。ここでいくつかの疑問が生じるだろう。まず第一に必ずしも長寿や不老不死を志向しない仏教(チベット仏教)の地に来て、なぜ不老不死なのかということである。不老不死といえば、むしろ中国の道教的の世界の方がそのイメージにふさわしいと思われるが、西洋人がイメージする理想郷は不老不死の世界なのか。ここらあたりはいろいろ混在していても、西洋人には矛盾を感じないのであろうか。だから理想郷なのだと言われれば、それもそうなのだが……。さらなる疑問は、シャングリラを探し当てた大ラマ僧の実体が物語の後半で明らかにされるが、200年以上前にチベット仏教の同地方にキリスト教の布教に来た元宣教師、それもルクセンブルク生まれの白人であるという事実である。欧米人の作家による作品のために、設定上、主人公が欧米人であるのはしかたないまでも、大ラマ僧も西欧人となると少し違和感が拭えない。この長寿の奇蹟を手に入れた250歳にもなる西洋人の老ラマ僧の下で、シャングリラは完璧な秩序を持って皆が幸福に暮らしているのである。そのような“楽園”に来た(連れてこられた)のが、コンウェイら4人たちであった(シャングリラでは、定期的に外界から増員されているのだろうか。そのような疑問さえわく)。

いよいよ自らの死期を悟った大ラマ僧は、後継者にコンウェイを指名するのだが、その誘いに迷うコンウェイ。なぜ彼は迷うのか。というのは、徐々にシャングリラの

良さに惹かれていく自分がいて、その一方では、もしかしたら、大ラマ僧の話はすべて嘘なのかもしれないと、悩み、葛藤していたからである。このコンウェイの悩みが深まれば深まるほど、読者もその世界に惹きこまれていく。そこがこの作品の真骨頂と言えよう。本当に理想郷はあるのだろうか……。そのようなコンウェイの悩みをよそに、マリンソンはシャングリラで知り会った若い女性（下界に戻れば老女なのだが）を誘って、この“楽園”から脱出計画を進める。定期的にシャングリ・ラに食料を届けに来る運送車に乗せてもらって、帰ることを企てるのである。それを止めるようとするコンウェイも、最終的にはシャングリラを去ることになる。

本編が終わった後、再び私とラザフォードが登場して、エピローグになる。普通手記の場合、一人称で描かれることが多いが、この物語はコンウェイの話でラザフォードが再構成したという形式であるため、三人称で描かれている。現代（あるいは近代）の人間が、理想的な暮らしをする“ある世界”に行って帰ってくるという話の構造は、例えばスウィフトの『ガリバー旅行記』と共通する部分があるが、当時の社会に対する風刺のあり方が異なっているのであろう。特に、『失われた地平線』は、キリスト教や仏教の考えとも関わるような、心の平安を求める穏やかな世界をイメージするが、小説の重要な要素となる大ラマ僧が実は白人の元キリスト教宣教師であったとの違和感に対して、むしろヒルトンがチベット仏教の地でキリスト教や仏教をも超える“更なる理想郷”をイメージしていたとするならば少しは納得できるのであるが、実際はどうであったのであろうか。

さて、この作品が映画化され、公開されたのは、1937年であった。フランク・キャプラが製作、監督し、主演はロナルド・コールマン。公開当時は132分だったオリジナル版は年月を経つうちに25分ほどカットされた短縮版で上映されていた。1967年にはオリジナル・ネガは完全に損傷し、完全版のフィルムも消失した。1973年に完全版復元のため世界に現存する資料とフィルムを集め、25分の映像は制作時のスチール写真とフィルムから作った静止画のイメージで埋めた132分のサウンド・トラックを復元した貴重な復刻版が蘇り、現在DVDで観ることが可能となった。なぜかタイトルは「失はれた地平線」である。筆者も偶々このDVDを手に入れることができて、実際に観たが、モノクロ映画ではあるが画面も美しく、一部の静止画像もあまり気にならずに一気に観てしまった。なお、上記のDVDになるまでの記述はDVDの裏面にある説明書きを参照した。

小説と異なる設定としては、まず登場人物で、主人公のロバート（小説でのコンウェイ）は極東史学者で外交官になり、小説での部下のマリンソン大尉は弟ジョージに

変更されている。映画で弟の設定に変更したのは、シャングリラに留まる方に心が大きく傾いていた主人公を兄にすることで、より一緒に故郷に帰ろうとさせる思いを強くさせる要素が計算されているのだろう。一方、訳ありのアメリカ人ヘンリー・D・バーナードそして東方伝道会のミス・ロバータ・プリנקロウに至っては、お尋ね者の詐欺師バーナードと影のある女性マリアに変えられており、その女性がシャングリラに来ると徐々に元気になっていく様子がみてとれる。また、主人公とシャングリラにいる美女ソンドラとのラブ・ストーリー的なものも挿入されている。それは、主人公にとってもシャングリラがより素晴らしい世界であることを描くためにも、よりインパクトの強いラブ・ストーリーも展開させたのではないか。そこに脚本家、監督の強い意図が感じられるよう。

なお、余談ではあるが、ヒルトン原作による別の映画として、筆者として印象に残るのは、やはり「チップス先生さようなら」である。それも1969年に2度目に制作されたピーター・オートゥール主演の作品である。ピーター・オートゥールといえばその代表作の「アラビアのローレンス」が一般的に挙げられるが、筆者はどちらかといえば前者の作品の方が好きであり、今なおオートゥールの目の輝く演技は忘れられない。その演技に対し、第27回ゴールデングローブ賞主演男優賞と1969年ナショナル・ボード・オブ・レビュー賞が贈られている。

4. ジョセフ・ロックとのつながり

1920年代はじめ、一人のアメリカ国籍のオーストリア・ウィーン生まれの植物学者が植物標本の採集のため雲南省の麗江にやって来た。その名は、ジョセフ・フランシス・ロック (Joseph Francis Rock)。彼はアメリカ農業部からの派遣で、雲南省西北部からビルマにかけての辺境地域の植物採集のために、1922年にはじめて麗江へやって来た。その任務が終わっても、彼はアメリカ農業部、地理学会、アメリカ博物館、ハーバード大学などからの援助で麗江に残り、同地方の植物、地理、民族文化などの現地調査、研究を続けた。その調査研究の対象は、植物学や地理学にとどまらず、民族学、民族文化研究などに広がっていった。ロックにとって愛すべき第2の故郷となった麗江地方の滞在は、中華人民共和国が成立する1949年までに、中国を出たり入ったりを繰り返しながらも27年間続いた。その間に幾度も探検をし、雪嵩村の自分の“家”に帰って来ては研究に没頭した。自分の家とは、玉龍雪山の麓の雪嵩村（現在の玉湖村）に定めた仮住まいの家のことであり、彼は村のナシ族たちと同じ伝統的な

住居を借りて、そこを拠点に地元のナシ族たちの助手を何人か引き連れての探検、調査研究を続けた。

その調査対象地域は、雲南省麗江、永寧地方から、独龍江周辺、さらには四川省木里などのチベット族の居住する広範囲に及んだ。そこで膨大な植物標本、民族学的な資料を集め、それらを写真に撮り、世界へと発信した。それら調査研究の結果を『ナショナル・ジオグラフィック』誌などに次々に発表した。彼の文章と写真によって、世界にこの地方のすばらしい風光と文化などが紹介されることとなったのである。

このようなロックの記事のなかでも、特にチベット族地方の報告をヒルトンが参考にしてシャングリラを描いたのではないかとされている。既述した雲南省のかつての中甸県の主張もこのことを根拠の一つに挙げているが、いろいろなチベット族の地方にもロックはしばしば出かけて行っている。そのなかで注目されるのが、1926年からの4年間に2度調査に赴いた四川省甘孜チベット族自治州の南部にある稻城・ヤデイン（亜丁）地方での見聞を文章にまとめ、写真も添えて『ナショナル・ジオグラフィック』1931年6月号に発表したことである。この記事と写真は、当時のアメリカやヨーロッパで大きな反響を呼び起こした。このロックの記事をヒルトンも目に通していた可能性があり、『失われた地平線』での理想郷シャングリラの構想の元になったのではないとも言われている。

もともと植物学が専門のロックではあったが、愛すべき土地麗江ナシ族の民族文化の魅力の虜になるにはそう時間がかからなかったようである。なかでもナシ族の祭司トンパとの出会いは、彼のトンパ経やトンパ文字研究へ傾斜していく決定的なきっかけになり、それは運命的な出会いともなった。彼は、麗江を中心に、ナシ族の様々なトンパ経典やトンパ文字資料の収集ならびに研究に没頭し、その結果などを世界、特に欧米に向けて発信し、発表し続け、大きな反響を巻き起こした。ロックは、彼の集大成として、1947年に、ナシ族を中心とした民族、自然、地理、歴史など克明に記載して纏めた大著THE ANCIENT NA-KHI KINGDOM OF SOUTHWEST CHINA『中国西南古ナシ王国』2冊、さらには1963年に、膨大な数のナシ族の象形文字で記されたトンパ教本を収集し研究し翻訳したA NAKHI-ENGLISH ENCYCLOPEDIA DICTIONARY『ナシ語-英語百科全書』を残している。

Ⅲ. 理想郷とはどのような世界か

1. 理想郷とは

理想郷といえば、イギリスの政治家、社会思想家トマス・モア（Thomas More）が1516年にラテン語で著した utopia『ユートピア』に登場する架空の国（実際は島）ユートピアが連想されよう。ユートピアは現実には決して存在しない理想的な社会として描かれ、その意図は現実の社会（当時のイギリスの政治や社会）と対峙させることによって、現実への批判を行い、疑問を投げかけることにあったと考えられる。しかしながら、モアによってラテン語で表現された“ユートピア”とは「すばらしく良い所であるがどこにもない場所」との意味があるとも言われている。

したがって、ユートピアという言葉を用いる時は、しばしば注意が必要かもしれない。現代人が素朴に「理想郷」としてイメージするユートピアとは違い、トマス・モアのいう「ユートピア」には平等で平和的な国家像が描かれてはいるが、その反面、どこか非人間的な管理社会の様相が色濃く現わされているからである。それは、ヒルトンが描いたようなシャングリラとも異なる理想郷なのかもしれない。トマス・モアが『ユートピア』を著した背景には、イギリスで盛んになりつつあった宗教改革とルネサンスがあり、それまでの中世社会が解体されつつあった時代であったことが注視されよう。さらに東インド航路発見などによる海外進出に伴い、イギリスの経済市場は急激にグローバル化し、輸出用の毛織物生産に必要な牧羊増産のために第一次の囲い込みが行われた時代でもあった。農民たちは土地を失い、貧困層の失業者が増加する一方で、都市の富裕層はさらに裕福になっていくような時代であった。時代は異なるが、グローバル化の浸透によって様々な格差が広がりつつある現代社会にあって、ますます富裕層と貧困層の格差が広がり、その二極化が進む現代と似た状況にあることは決して偶然のことではないだろう。このような状況に疑問を抱いていたモアが描く理想国（理想郷）は、人々は平等で財産を所有せず、男女ともに質素な服を身に纏い、一日6時間以上働く必要はない、これまで言われてきた共産主義的国家のようでもあった。それは戦争の無い平和な国家像であったが、これまで実際に現れた共産主義国はむしろ戦争や国際紛争などを行い、結果的には内部崩壊の道を辿って、現在このような国家はほぼ無くなってしまったと言えよう。

このようにモアの描いたユートピア＝理想国は、平等で（奴隷はいるが？）戦争の無い平和な国家像であったが、その社会秩序を徹底化するために、すべてが管理され

る社会でもあった。平等はあるが自由のない国家とも言えるが、もともと自由と平等は併存することが至極難しいのであろうか。このようなモアが構想した理想郷（理想国）は、どちらかといえば非人間的な管理社会の没個性的なイメージに対して、むしろ人々の感性に重きを置くユートピアを志向した作品なども現れた。そのなかでも、例えば、他とは異なる中世的な牧歌的な理想郷を構想したウィリアム・モリス『ユートピアだより』（1890年）や、資本主義社会と機械文明への批判を行ったエドワード・ベラミー『かえりみれば』（1880年）などが描いた別のユートピア世界への主張にも注目できよう。

2. シャンバラ伝説

チベットには「シャンバラ」という理想的な仏教国の伝説が流布していることはよく知られている。チベットには『カーラチャクラ・タントラ（『時輪タントラ』）』という密教経典が伝わっているが、この経典はシャンバラからインドを通りチベットに伝わったとされている。シャンバラは伝説上の国なので、地理的には見つかることはないのであるが、実際にシャンバラへ行き、瞑想の中で訪れたという人の話が伝わっている。ヒルトンは、このシャンバラ伝説を参考にした可能性は否定できない。「シャングリラ」と「シャンバラ」とは、それぞれの言葉の響きも似ている。チベットには、シャンバラ伝説とは別に、隠れ里（チベット語で「ベユル」と言われている）の伝説も伝えられている。隠れ里は、一個所だけではなく、ヒマラヤ一帯に点在しているとも言われる。

では、元々のシャンバラ伝説とはどこからきたのであろうか。まず、シャンバラとはヒンドゥー教の説話文学『プラーナ』に説かれた一種の理想郷のことである。ヒンドゥー教には、シヴァ神を崇拝するシヴァ派とヴィシュヌ神を崇拝するヴィシュヌ派を中心にいくつかの派がある。このうち、ヴィシュヌ派の最高神ヴィシュヌは、インド古来の叙事詩（『ラーマヤナ』や『マハーバーラタ』など）の英雄ラーマ王子やクリシュナなど、さらには釈尊などの偉人の権化（アヴァターラ）であると考えられている。仏教は、現在インドではヒンドゥー教の一派とみなされている。このような権化のなかで「10の権化」の考えが広まり、権化最後がカルキと呼ばれる英雄神で、彼が支配する国がシャンバラである。ここで注目されるのが、元々インドから伝わるカーラチャクラ・タントラではあるが、チベットに伝わっていくことで、同じシャンバラ伝説でありながらもシャカがカースト制を批判したことへの解釈ならびに結論が

異なるということである。すなわち、ヒンドゥー教のヴィシュヌ派はシャカ（釈尊）がカースト制を批判したので社会の秩序が乱れたため、カルキ神の出現を説いたが、チベットの『時輪タントラ』ではシャカ（釈尊）の行いを肯定してすべての民を仏教徒にしてカースト制を廃止するのがカルキ神であるとした。

『時輪タントラ』では、シャンバラは中央アジアの“ある所”にあると考えられ、来るイスラームとの最終戦争の時期に備え、シャンバラ王の出現を待っているという。このようなシャンバラ伝説はインドで仏教が滅亡した後もチベットへ広まっていた。イスラームとの争いの話は、イスラーム教徒（ムスリム）の侵入というインドの歴史が反映されており、また仏教徒の復活を強く望む意図があるのであろう。

チベットではこのような伝承が独り歩きして、空想的な伝説が成立した。近代に入り、この伝説は欧米でブームを巻き起こし、本家であるヒンドゥー教ヴィシュヌ派カルキ伝説以上に知られるようになった。しかし、これはチベット人の“空想の産物”であるとも言われている。したがって、シャンバラ伝説がもともと空想物語であるならば、シャングリラ伝説もさらなる空想の物語ということも言えようか。それでもなお世界では理想郷が求められている。

この伝説は、その後、チベットから中央アジアの地域に広まった。今世紀の初めに、チベット文化に触れた欧米人をも魅了した。元々パンチェンラマ（チベット仏教におけるダライラマに次ぐ二大活仏の一つ）はカーラチャクラ・タントラ（『時輪タントラ』）の権威であることはよく知られているが、第3世ロサン・ペンデンイエシェーが『シャンバラへの道』という旅行案内書を出版したことで、さらに伝説化に拍車がかかってしまったようである。チベットでは伝承が独り歩きして、空想的な伝説が成立した。近代、この伝説は欧米でブームを巻き起こした。17世紀、F・カブラルらイエズス会の東洋布教報告は、ヨーロッパ社会に、チベットに対する秘教的聖都のイメージを伝えた。19世紀、さらなる神秘的な「アガルタ（スリランカ地下聖都）伝説」がフランスの神秘家ダルベードルによって吹聴された。20世紀になると、ロシア出身の神秘思想家レーリヒによって本格的なシャンバラ思想が展開され、ソ連とアメリカの和解と心霊的世界の樹立が唱えられた。なお余談ではあるが、かつて「オウム真理教」も日本「シャンバラ化計画」のようにシャンバラという語を用いていたことがあった。

元々、シャンバラ伝説は『時輪タントラ』での主要な位置を占めていないことも指摘されてきたが、近年、ダライ・ラマ14世が東洋と西洋の交流が進み、相互理解が深まるようにと、世界各地でこの『時輪タントラ』（カーラチャクラ）の教えを広めているという。

3. 問われる理想国（理想郷）のあり方

理想郷あるいは理想国のあり方を考え、それを構想することに意味はないだろう。筆者はおおいにあると考えたい。というのは、理想国の構想はこれまで現実逃避を目的にするのではなく、現実を打破するために思考することに意味があるからである。辞書で「理想」を引くと、「考える限り最もすばらしい状態」、「最も望ましい姿」と一般的に定義され、さらには、「行動の目的となって現実に意味を与える」、と付け加えているものもある。明治に啓蒙思想家西周（にし・あまね）によって、西洋でいうideal（イデア）などから訳された「理想」という造語は、広義的には、「行動の目的となって現実に意味を与えること」という本来あるべき意味が含まれているに注視したい。

トマス・モアも「ユートピア」の最後で「私としては、例えユートピア共和国にあるものであっても、これをわれわれの国に移すとなると、ただ望むべくして期待できないものがたくさんあることを、ここにはっきりと告白しておかなければならない」と述べているように、理想郷を構想するということは、必ずしもユートピアの実現を目的としたものだけではなく、むしろこれまでの時代の理想国（理想郷）像を考察し、それぞれの時代が抱える社会矛盾へ疑問を投げかけることに意義があると思われる。もともとユートピア思想は、アメリカ革命やフランス革命の母胎となったとも言われ、そればかりか、理想の都市や共同体構想、さらには社会主義・共産主義、合理主義、テクノロジーの進歩など現代に及ぶ発見や発明なども、すべてこの系譜に繋がると考えられよう。しかしながら、モアが描くユートピアの行き着く先は、20世紀のヒトラーやスターリンの例にみられたようなディストピア（暗黒世界）になる危険性も注意が払われるべきであろう。『ユートピアの歴史』を著したグレゴリー・グレイズが、「ユートピアへの志向とは、可能と不可能の狭間にある空間を探索することなのだ」と述べているように、理想を掲げることは現状打破を画策し、達成目的だけでなく、対照することを目的として、理想国を構想すること自体が有意義なことで認識される。2001年9月11日に起きたアメリカ・ニューヨークでの同時多発テロの悲劇が「アメリカ中心の国際レジーム」の限界を我々に見せ付けたとともに、さらには2011年3月11日に起きた東北地方太平洋沖地震の発生とそれともなう東日本大震災での福島原発の重大事故はこれまで有効なエネルギー源と考えられていた原子力の危険性を見直しを改めて我々に問う結果となったと言えよう。このような状況を鑑みれば、理想国（理想郷）について改めて構想をし直すことは大きな意義をもつはずである。

その意味からも、日本ではあまり注目されていないが、イギリス国際戦略研究所（The International Institute for Strategic Studies）が主催するアジア安全保障会議を「シャングリラ会合（ダイアログ）」と通称しているのは意味深長なものを感じるのは筆者だけであろうか。この会議は日本、米国、中国、韓国、英国、豪州、シンガポール、ベトナム、マレーシア、フィリピンなど31か国に及ぶ国の国防大臣などが、アジア太平洋地域の課題や防衛協力などを議論するために毎年、シンガポールのシャングリ・ラホテルで開かれている。この集まりは、毎年シンガポールのシャングリ・ラホテルで開催され、その名前からシャングリラ・ダイアログとも呼ばれる。西洋人が描いたチベットの理想郷であるシャングリラ、その精神を受け継ぐと名がつけられたシャングリ・ラホテルだが、それも初めて開業したシンガポールのシャングリ・ラホテルの名称に由来するこの会合で、チベットを治める中国とそれに対応するアメリカ・日本・東南アジア諸国の間で、はたしてシャングリラのような理想郷の関係をつくれるのであろうか。はたまたそれは架空に帰するのだろうか。

中国が思い描く将来の自国の役割と、西側が中国に望む大国としてのあり方は、決定的に食い違っているようにみえる。13年目となった昨年の会合は、アジア地域の安全保障上の懸念がまさに明るみに出た年であった。中国が係争中の領土・領海について攻撃的な姿勢を強め、近隣諸国が脅威を感じることも少なくなく、むしろ今後の動向が注目されるだろう。同時に、今後のイスラーム過激派、なかでも「イスラム国」（この呼称については実態が伴っていないとの点から諸説あり、「ISIL」との呼称もあるが、ここでは「 」付きで表記しておきたい）の動向にも目が離せない。

おわりに

本稿では、シャングリラ伝説は主に西洋人がつくりあげた理想郷であることを確認するとともに、それは西洋人によるチベットへの幻想や憧れから生まれたことにも注目した。それはトマス・モアが描いた「ユートピア」とは異なる世界であり、イメージであろう。元々シャングリラはインド・チベットの仏教世界に流布する経典『カーラチャクラ・タントラ（『時輪タントラ』）』での「シャンバラ伝説」を源流としている。しかし、このシャンバラ伝説も架空物語の上にできた伝説と言われている。インドからチベットそして中央アジアへ伝わり、現実とは異なるチベット仏教の神秘さに魅せられた西洋人から新たな伝説が世界に広まっていった。そして、日本や中国などのア

ジア諸国へ西洋人がイメージした理想郷シャングリラが広まった。シャングリラ＝シャンバラ＝チベットは、欧米人にとっての「心の聖地」と言える。しかし、そのように言いながらも、どこかチベットはあくまで清貧の地との固定観念にとらわれていないだろうか。チベットは清貧の地域でいいと思われてきたことは否定できないだろう。特に欧米ではその念が強かったのではないだろうか（今でも一部そうなのかもしれない）。遠く離れたヒマラヤ山中の世界であるため、そのようにイメージされてきたことは仕方ないこともないが、現代にも及ぶ課題なのである。かつて理想社会の入りの口として、アメリカ第33代大統領フランクリン・D・ルーズベルトは、メリーランドの大統領別邸（現在のキャンプ・デービッド）を、平和への希求を込めてシャングリラと名づけたと言われている（また太平洋戦争中、日本空襲のアメリカ航空機の発進地としての空母にもシャングリラと命名）。この逸話はとても象徴的な話であろう。西洋が夢想したチベットの理想郷シャングリラは必ずしも、チベットでの平和・安寧な状況に今なおない現実があり、欧米人が考える平和とアジアの現実にはかなりの落差があることも事実だからだ。

シャングリラ伝説とは何か、その底流にあるものは何か。シャングリラは、西洋からみた理想のチベット像が投影された物語と言わざるを得ない。そして、チベットへの理想と現代のチベットの現実との乖離の溝はなかなか埋められていない。つまりチベットはかつての西洋人たち（西洋文化を積極的に取り入れた日本人も入るかも）が神秘世界として憧れた土地である。当然西欧人たちが求める理想郷などは存在せず、むしろ中国に統治されているチベットの現実とのあまりの落差に、いろいろな今日の問題が横たわっている。我々の社会では、それでもこの“魅惑的な言葉シャングリラ”は今なおいろいろな分野で理想郷の代名詞として広がる矛盾を抱えている。逆な見方をするならば、この「シャングリラ」という言葉を聞く度に、理想と現実の狭間を夢想することになるだろう。

その一方、シャングリラ（架空の世界）を観光業振興のために、現実の世界では単なる地名変更によって“仮の理想郷”を復活させようとしている。それもまさに矛盾の出来事の一つであるが、それとも、チベット族が住む地方政府の“町おこし”のための必死な努力の結果としてみるべきであろうか。2008年、チベット暴動が起きて、中国政府はチベット族（特にチベット仏教の僧侶たち）に対し厳しい取り締まりを強化した。西欧社会（この場合は日本も含めた）で中国政府の対応などに批判したことに対して、一部の中国の知識人（主に漢族）は、これを欧米人の「シャングリラ・コンプレックス」であり、それをオリエンタリズムとして反論した。どちらが正論なの

かを論じるには、まだまだ難しい問題である。ただし、一つ言えることは、現実のチベット（特にその自治区都ラサ）は、より中国化（＝漢族化）とグローバル化（＝アメリカ化）が進んでいる現実があるということである。

その意味からも、独立国であるが、「幸福の国」と形容されてきたブータンの行く末も気にかかる。ブータン王国はかつて構想された理想郷シャングリラといくつかの点で類似しているからである。ヒマラヤ山脈に位置するブータン王国は、多くの先進国がGNPの改善に重きを置いた経済政策を採用しているのに対し、GNH（国民総幸福量）を国の指標としていることはよく知られている。ブータン政府は、行き過ぎた資本主義社会での多くの歪みや弊害を指摘し、必ずしも幸福とはいえない現実を我々につきつけているが、近年そのようなブータンでさえ、グローバル化と情報化社会の拡大から逃れられない状況が現れているという。14年前にインターネットとテレビが解禁され、国外からの情報が流れ込むようになり、国民に消費文化が急速に浸透している。

どの国もグローバル化の時代の中で、資本主義の影響を逃れることは出来ないのであらうか。そのように考えてくると、とても“あたりまえであるがとても難しい”答えに立ち戻らざるを得ないのかもしれない。すなわち、キリスト教や仏教の考え方とも関わるような、心の平安を求める穏やかな世界をめざすならば、一番大切なのは、主に中国や西洋でもこれまで問題にされてきた「中庸」という考え方であらう。簡単に言えば、“ほどほどがよい”という真に当たり前だが、とても難しいことであらう。中庸ということを意識すれば、争いのない幸せな生活が送れるかもしれない。その意味からも、ますます中庸の精神が必要なかもしれない。本当の理想郷とは、中庸をめざす“ほどほど社会”のことなのだろうか。

最後に述べておきたいことは、「シャングリラ」という言葉一つがもつ背景には、このような“膨大で広大な”時代的、空間的世界が広がっている。それに気が付くか、気が付かないかでの差はあまりにも大きいに違いないと。

参考文献

1. ジェームズ・ヒルトン『失われた地平線』（池央耿訳）河出書房新社、2011年
2. James,Hilton Good-bye Mr.CHIPS （KENKYUSHA POCKET ENGLISH SERIES）
KENKYUSHA TOKYO 1953（ジェームズ・ヒルトン『チップス先生さようなら』）
3. ジェームズ・ヒルトン『学園連続殺人事件』ポプラ社、2004年
4. 栗原悟『雲南の多様な世界－歴史・民族・文化』大修館書店、2011年
5. トマス・モア『ユートピア』岩波新書、2011年（初1957年）
6. Joseph Francis Rock THE ANCIENT NA-KHI KINGDOM OF SOUTHWEST CHINA
HERVARD UNIVERSITY PRESS 1947
7. 李群育主編『新編麗江風物志』（雲南風物志叢書）雲南人民出版社、1999年
8. 田中公明『超密教 時輪タントラ』東方出版、1994年
9. ニコレイ・レーリヒ（著）澤西康史（訳）『シャンバラの道』中央アート出版社、1996年
10. グレゴリー・グレイズ（著）小畑拓也（訳）『ユートピアの歴史』東洋書林、2013年
11. 池上永一『シャングリ・ラ』上・下 角川書店 2005年